（様式）

令和3年度 学校評価 学校関係者評価書

学校園名	三木市立志染小学校

1 学校教育目標

心豊かに 元気よく 主体的に学ぶ子の育成

～ 元気なあいさつ 笑顔いっぱい みんなかがやく 志染っ子 ～

2 本年度の重点目標

・豊かな心と社会性の育成
・「確かな学力」の育成
・子どもの実態や内面理解に基づく指導の充実
・自立した人づくりに繋がる生活習慣の育成

3 自己評価結果（達成状況）【 A：達成している　B：概ね達成している　C：あまり達成していない　D：達成していない 】

評価の観点	評価項目（取組内容）	取組(達成）の状況	評価	改善の方策
学習指導	○確かな学力の向上を図る 学習指導の充実 ・「学び合い」でつながり 学びを深める授業づくり ・主体的に学ぶ子の育成 ・教育課程特例制度による 「外国語活動」の充実	・ 基礎基本の定着を目指し課題を精選し毎朝10分間のホットタイムを実施し学習習慣の定着と個別指導の充実を目指した。 ・ 学習内容に応じてタブレット端末を活用しているが低学年ではなかなか使用が進んでいない。 ・ 学習に見通しを持たせ、じっくりと文章から読み取る力をつけさせることを目標に授業づくりを行い徐々に成果が出始めている。 ・ 高学年で英語を専科担当が指導するとともにALTとの連携を密にし、系統的な指導を行った。	B	・ 学習に支援が必要な児童に対し、授業内での支援を継続していくとともに、ホットタイムや家庭学習を通して自ら苦手を把握し改善に取り組める支援を継続して行う。 ・ タブレット端末を使用することが目的と考えず、研究を重ね有効に活用する方法を探る。 ・ 少人数であることを活かし、全員が発言をして活躍できる「学び合い」の場を意識して設定していくとともにじっくりと文を読み自分で考える時間を確保する。 ・ ALTとの授業外の交流時間を設定し、児童が積極的に交流を図れる場を増やす。
道徳教育	○道徳の時間の充実 ○家庭・地域と連携した 道徳教育の充実	・ 年間指導計画に基づき、すべての価値項目に関する授業を行った。 ・ かがやきの木の取組を通して友達の良いところを見つけ、互いに認め合う学級風土を醸成した。 ・ 参観日、オープンスクールで道徳の授業公開を行い指導について理解を深めた。 ・ 「兵庫県道徳副読本」の親子読書を年2回、夏季休業、冬季休業に行い家庭で話し合うよい機会となった。	A	・ 児童の実態に合わせて重点項目や年間指導計画の見直しを行い、道徳の時間に身に付けた道徳的価値を実生活に生かせるように取り組む。 ・ 友達の良いところを認めるだけでなく自分の良いところに自信を持つなど自尊感情を高める取組を行う。 ・ 道徳の授業だけでなく、全ての学校生活において、思いやりや相手を理解するなど児童の道徳性を培う。 ・ 授業公開や親子読書を継続し、さらに地域・家庭と連携した道徳教育の充実を図る。
人権教育	○全教育活動における 人権教育の充実 ○家庭・地域と連携した 人権教育の充実	・ 人権作文や標語・ポスターの制作は、児童の人権意識の高揚につながった。 ・ スマイル友だち集会ではパラスポーツについて紹介し多様性の理解と共生社会の実現に向けて提案することができた。 ・ 「かがやきの木」や「かがやきの森」の取組を通して、互いの良さを認め合い全教育活動において自分や友だちを大切にする心を育むことができた。ただ、自分に自信が持てない児童がまだまだいることが残念である。 ・ 教育事業参観は、4年生が教育事業について学ぶ貴重な機会となった。あわせて保護者の方の思いを聞くことができた。 ・ 「親と子が共に学ぶ人権学習」では、コロナ禍ではあるが工夫して保護者と事前の話し合いの場をもち、各学年の人権目標に即した授業を展開することができた。	A	・ 身の回りの人権課題を意識させ人権作文やポスターの制作に取り組ませることでさらに人権意識を高める。 ・ 児童による主体的な活動であるスマイル友だち集会を通して人権課題について提案し問題提起する取組を継続する。 ・ 「かがやきの木」の取組を継続し、友達の良さに加えて自分のよさに気づき、自分を肯定的に認めることができるようにする。また、通信やHPで児童のがんばりを発信し、地域、家庭とともに児童の自尊感情を高めていく。 ・ 教育事業参観を通して教育事業に対する理解を深めると共に地域の方の思いについて理解を深める。 ・ 親と子が共に学ぶ人権学習を通して系統的な人権学習を保護者と協働してすすめ、人権に対する意識を高める。

4 自己評価方法の適切さについての学校関係者評価

自己評価の方法は適切である。
・ 評価項目を決定し、三者にアンケートを取りその内容を分析したうえできちんと改善策を考えることができている。
・ 各評価項目に関するアンケートがあり、それを踏まえた自己評価がしてあり客観性がある。
・ 記載事項、特に改善の方策について具体性が少なくわかりにくい点があるので今後改善されることを望む。

5 評価の観点ごとの学校関係者評価

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
○学習指導の自己評価Bは適切である。 ・ ホットタイムやタブレットを活用し基礎基本を確かにしたいという思いがよくわかる。やや具体性に欠けるため、間違えた問題を家庭で取り組むような課題にする「自学ノート」にも取り組んだらどうだろうか。 ・ タブレットの有効活用をぜひ研究してほしい。誰が何を間違え、何回回答し、正解したかわかるようになればありがたい。 ・ ALTとの授業外の交流をぜひ具体的に考えてほしい。掃除、給食、放課後のクラブ的活動など楽しみである。
○道徳教育の自己評価Aは適切である。 ・ 一人一人が大切にされている様子がアンケート表記からも伝わる。 ・ 親子人権学習は親の思いなど子どもに直接伝えるいい機会だと思うため続けてほしい。 ・ 実態に合わせた項目指導とは、具体的にどの価値なのだろうか。大変大切な着眼なので市販のものでよいので道徳実態調査に取り組み、各学級違ってもよいのでその重点について実践してほしい。 ・ 自分の良いところを見つけるために、まず自分と友達を分けてアンケートを実施し、実態把握から始めてほしい。 ・ アンケートには、「自分や友達のよいところ」とあり人権項目に扱われている。人権か道徳なのか、いま一度検討してもいいのかもしれない。 ・ 「かがやきの木」の取組はとても良いと思う。 道徳は子どもたちにとって少し難しく退屈に思われるイメージだが、少人数を活かし先生方と保護者が密につながって考えていければいいと思う。
○人権教育の自己評価Aは適切である。 ・ 人権ポスター、スマイル班、かがやきの木、親子人権学習など具体的な実践がよくわかり、アンケートでも道徳同様「よくできている」の回答が多く、評価の根拠がよくわかる。 ・ パラスポーツの「ゴールボール」を体験して、子どもたちはその難しさを実感していた。発表を通して多様性の理解と共生の難しさを理解したと思う。 ・ 「かがやきの木、森」など素晴らしい取組だと思う。自分を好きになれる子どもが増えたらよいなと思う。子どもたちは褒めて育ててほしい。 ・ 杉の子学級については、毎年他地区の4年生児童も素直に受け入れ理解してくれていると思う。杉の子学級の人数も少なくなってきているが、教育事業について4年生の親子で学ぶという取組はよかったと思う。 ・ 恒例の親子人権学習が、人権意識を高める一つのきっかけとなっているようだ。児童にとっても保護者にとっても、本音でやり取りできる有意義な授業だと思っている。

生活指導	○家庭と連携した 基礎的基本的事項の習慣化 ・挨拶運動の推進 ・場に応じた言葉遣い ○いじめや不登校児童を 出さない取組 ・「学校いじめ防止基本方針」 ・「学校IKOKAマニュアル」	・ 指示をするのではなくどうすることが適切かを考えて行動させそれを評価することを行った。指示を待つだけでなく自分で考えることのできる児童が増えた。 ・ 学校生活において課題となる事を目標として設定した。具体的な課題として認識しやすいものであったので学校生活の改善に効果が見られた。 ・ 生活チャレンジ週間において、家庭学習、挨拶、言葉遣いなど意識することで自分自身を高めることのできる目標に定め、指導と評価を行った。家庭にも周知し声掛けを依頼し連携して支援した。 ・ 毎月の生活指導委員会で、児童の情報共有を行うとともにスクールカウンセラー等の専門家とも情報共有し対応をすすめた。 ・ 気になる児童を多くの目で見守り、指導の統一と早期対応を心掛けた。 学期ごとの生活アンケートの実施による実態把握を行うとともに個別面談を行い、課題の早期発見・早期解決に努めた。 ・ 欠席が続く児童に対しては情報共有するとともに「学校IKOKAマニュアル」を基本に対応した。	B	・ 児童にどのように行動することがよいか、何のためにそうするのか判断して行動する機会を発達段階に応じてさらに設ける。 ・ 生活チャレンジ週間のテーマや月別生活目標の設定にあたっては、児童が取組によって自らの変化や成長を感じることのできるものを選ぶ。 ・ 場に応じた言葉遣いや挨拶の指導に意識して取り組んだが、まだまだ課題が残る。各学年の成長段階に応じて意識づけさせていくことが必要である。 「生活アンケート」と「アンケートを基にした個別面談」を毎学期継続して ・ 実施することで課題の未然防止・早期発見・解決を行う。 日々の児童観察や生活アンケートから児童の気になる様子に気を配り、 ・ 明らかとなった課題に対して丁寧に事実確認を行い、家庭と連携し、改善を図る。 課題を抱える児童が非常に増加している。子どもたちの気持ちに寄り添い支援する体制を整え、心が休まる場所としての役割を果たすことができるようさらに取り組む。	○生活指導の自己評価Bは適切である。 ・ 「自分で考えることのできる児童が増え、学校生活の改善に効果が見られた」の言葉だけで明るい気持ちになれた。学校教育目標にある「自ら考え自信をもって表現できる子」になってほしいと思う。 ・ 生活チャレンジ週間、言葉遣いやあいさつ指導、「生活アンケート」など具体的な取組がよくわかる。 ・ 気持ちのいい挨拶は人間関係を築くうえで一番大事なこと、家庭と連携をとってご指導お願いしたい。 ・ 欠席が続く児童への指導、頑張ってほしいと思う。寄り添い支援するチームを結成し、別室登校も視野に入れ学校全体で取り組めたら理想である。 ・ 手厚い対策と取組があり、保護者として安心している。おそらくストレスをためているであろう子どもたちにとって、学校が楽しい空間であってほしいものだ。
特別支援教育	○児童理解に基づく適切な指導と 必要な支援の充実 ○交流及び共同学習の推進	・ 個別の支援計画や指導計画を作成し、配慮を要する児童の情報交換を行って共通理解を図り、全教職員で情報を共有し指導することができたが、継続的な情報共有には至らなかった。 ・ 課題のある児童に対し個別最適化された学習支援を行うことはできなかった。 ・ 特別支援学級の児童に対し交流学級の児童は十分理解し、支援や交流を行うことができたがそれを全校に広げることはできなかった。 ・ 友達の特性を理解し優しく接することができたが、我慢して受け入れてしまうためお互いの成長につながっていない点が気になる。 ・ コロナ禍であったが工夫して特別支援学校との交流を行った。交流の目的をさらに明確にし、双方にとってより有意義なものにしたい。	B	・ 年度初めに支援計画や指導計画を作成し、全教職員の共通理解をすることに加え、定期的に経過報告をする機会を設け対応を協議するとともに学期に１回児童理解研修を持ち全職員で情報を共有する。 ・ 児童一人一人に応じた支援や指導を充実させる。 ・ 特別支援学校との交流は１回限りの交流となってしまった。その場の交流だけでなく継続的に連絡を取り、同じ社会に住む仲間としての意識を育てていく。 ・ 特別支援学級児童との交流について全学級で計画的に行い理解を深める。 ・ 支援を要する児童について理解し受け入れることはできている。更に、本人の特性を理解しながら自立に向けた支援ができるように、理解教育を進めていく。	○特別支援教育の自己評価Bは適切である。 ・ 取組状況を見ても今一歩であったことがわかる。本人の成長は大きなものがあると感じるが、自立に向けた支援まで考慮してあり今後のさらなる成長が楽しみである。 ・ 理解して受け入れられていることが素晴らしい。継続した取組を期待する。 ・ 特別支援学校との交流は必要だと思う。3・4年の柔らかい心のときに幾度か交流してほしい。多様性を知って共生を考えることができたら、本当に有意義であると思う。 ・ 交流は良い取組だと思う。人としての多様性を知る機会だと思う。継続してほしい。 ・ 至らなかった、できなかった等の詳しい事情は分からないが、配慮を要する児童の間違ったことでも我慢して受け入れてしまうというのは小学生には難しいのかなと思った。 いろいろと難しいとは思うが，子どもたちに寄り添い対応してほしいと思う。
特別活動	○自主的活動の充実 ○異年齢集団活動の充実 ・スマイル班活動 ・委員会・クラブ活動 ・学級活動 ○ねらいに即した振り返りの充実 ○一人一人が活躍できる場の設定	・ 委員会活動やクラブ活動では、限られた時間の中で児童が考えて活動できるよう工夫して取り組んだ。しかし、どうしても教師主導となり、児童が主体的に活動することについては十分ではない。 ・ スマイル班（異年齢集団）の活動を通して、高学年は責任感を育むことができている。また、活動後のふりかえりを大切にし、感想を述べあうことで、高学年児童は「やりがい」を感じ、低学年児童は「目標とする姿」を思い描くことができ、次の活動への活力となっている。	B	・ 委員会活動について組織や実施回数、指導の方法等について見直し、児童の自主的活動を充実させるための工夫を行う。 ・ 委員会活動をの在り方について再考し、活動を連携させることで学校全体としての方向性を示し、より有意義な活動とする。 ・ スマイル班活動や委員会活動において、次年度その役割を担う児童と早い段階から計画の立案や活動を共に行い、取組がスムーズに引き継がれるよう工夫する。	○特別活動の自己評価Bは適切である。 ・ 児童が考え活動する中で指導者のアドバイスをもらうのは当然である。それすらなければ自主ではなく自分勝手なこととなる。児童が自分たちで考え行動したと思える支援を継続してほしい。 ・ 子どもたちだけで実施することが理想・・・ 難しいだろうが、少しでも子どもたちだけで活動できるように対応してほしい。 ・ スマイル班での高学年と低学年の関係、今後も継続してほしい。またスマイル班活動での改善の方向性は正しいと考える。 ・ スマイル班活動は志染小をまとめ、児童同士の結束を強める重要なものだと思う。コロナで発表も難しかったと思うが、継続してほしい。現状況で教師主導でも何ら問題ないと思うが。
家庭・地域との連携	○「地域の中の学校」として 信頼される学校づくりの推進 ・広報活動の充実 ・「ふるさと学習」の充実 ・ボランティア（人材）の活用 ・異校種間連携の充実	・ 感染症対策を工夫して学校行事を行い、可能な限り保護者に学校にお越しいただき児童の活動する様子を見ていただくことができた。 ・ 学校通信の地区回覧やHPの更新により積極的に情報発信を行った。 ・ 「志染っ子かがやかせ隊」（人材バンク）の皆様には、今年度は来校していただくことができなかったが、環境体験学習（稲の栽培、しめ縄作りなど）や老人会との交流などを行うことができた。 ・ 図書ボランティアや志染会などの方とのつながりは維持できており、コロナ禍が落ち着いた際には活動の再開を予定している。 ・ 緑が丘中学校区の小・中学校との交流会や合同研修会を実施し、スムーズな接続に向けて取り組んだ。 ・ 新型コロナウイルス感染症拡大の中ではあったが、あけぼの認定こども園、志染保育所と交流を行った。 ・ 入学後のスムーズな学校生活が送れるように、新入生についての情報交換を認定こども園等と行った。	A	・ 感染拡大の状況は今後どうなるか不透明ではあるが、工夫して学校行事や、参観日等の学校公開を行うとともに学校からの便りや、HPの更新に ・ よる情報発信を積極的に行い、継続して地域とともにある信頼される学校づくりを推進していく。 ・ 「志染っ子かがやかせ隊」（人材バンク）の指導者と新規・継続の連絡を取り合い、教育効果を上げるために地域指導者の活用をしていく。 ・ 就学前の園や中学校区の小・中連携は、年間計画の中に交流活動を位置づけ、今後も交流を工夫して行う。 ・ 緑が丘中学校区の小中学校と連携し、特に高学年で学習指導や生活指導等についてルールの統一を行い中１ギャップの解消に努める。 ・ 高学年で緑が丘中学校区の小学校と交流行事を持ちスムーズな接続に向けて取り組む。 ・ 認定こども園、保育所等と連携し新入生の情報共有を行うとともに受け入れる児童の意識を高める取組を行う。	○家庭地域との連携の自己評価Aは適切である。 ・ コロナ禍の中家庭訪問、タブレットを使い学力保障、そして学校通信、学級通信、HPなどの情報発信を行い感心させられる。 ・ 多くの交流が制限される中、家庭や地域との連携は大変だったことと思う。積極的な情報発信で保護者も安心できたと思う。 ・ コロナ禍の最中保護者地域との交流を優先して考えていただき本当にありがたい。安心して志染小の先生方と今後も取り組んでいくことができる。 ・ 人材バンクはとても良い取組だと思う。子どもたちのためにいろいろな方面の人脈は継続してほしい。 ・ 幼少中連携にも努力され素晴らしい。